居つた英國の貿易事務官マカルトニー氏の手に依つて英國に蒐集せられ、また露西亞に送られたものもあつて、此等が益々學者の注意を惹くことになつて來た。一方又宣教師や地理學者なども、常に此の遺跡及び出土品に對して注意を怠らなかつたもので、有名な人としては佛のヂュトルイル・ド・ラン氏、グルナール氏、瑞典のスヴェン・ヘディン氏、露西亞のクレメンツ氏、グルジ・グルジマイロ氏などを擧げることが出來る。此等の人々は土人の採集した遺物を買うたり貰つたりするに止まらないで、自ら探檢にも發掘にも從事して、從來土人によつて傳へらるる通り、多くの遺跡遺物が實際此の地方の地中に存在することを世に紹介した。恰も此の頃中央亞細亞から東北に當る外蒙古の地では、露西亞や芬蘭の探檢家が、唐代のトルコ族なる突厥とか回鶻とかいふ部族の殘した文獻を探りあてゝ世間に紹介し、從來殆んど何事も知ることの出來なかつた民族の文化の上に、新しき光明を與へた時であつたので、此の中央亞細亞の遺跡遺物の紹介は一層學界を刺戟して、在來の書物の上に於て知り得べからざる消息を、昔在りしが儘に地下に横はつて居る遺物について究め、重要にして然も不明なる東西文明の交渉の跡を明かにしようとする希望が、歐洲諸國の間に盛になつて來た。

## 四　諸國の探檢

一八九九年〔明治三十二年〕に羅馬で萬國東洋學會の開催された時には、歐洲學界に於ける中央亞細亞探檢熱は、餘程高潮に達して居たものゝ如く、遂に萬國中央及び極東亞細亞探檢協會組織の議が、露西亞のラドロフ博士によつて此の會議に提出せられ、ついで一九〇二年漢堡に開かれた同會で愈々之が成立を告げて、土地の關係から